

JST、バンコクで開催 第4回さくらサイエンスクラブタイ同窓会

科学技術振興機構(JST)は2月8日、タイ・バンコクにおいて、第4回「さくらサイエンスクラブタイ同窓会」を開催した。さくらサイエンスクラブタイ同窓会(SST)のオラワン幹事長及びJSTさくらサイエンスプログラム推進本部の大槻室長両名の挨拶で、同会はスタートした。同窓会によるシェアリングセッションでは、幹事の一人であるチュラロンコン大学のサハルタイ准教授がモデレーターを務め、パネリストとして3名が登壇した。

一人目のタイ国家計量標準機関で国際関係を担当するタナコーンさんは2016年に「さくらサイエンスプログラム(SSP)」で日本の産業技術総合研究所を訪れ、ASEAN経済共同体(AEC)発足に向けたクオリティインフラ整備を学んだ。

二人目のパネリストであるDansai Group Company LimitedのCEOであるパットさんは、2017年にSSPで名古屋大学を訪問。未来社会を創造するテクノロジーブレイク



オラワン幹事長(左から4人目)、大槻室長(同5人目)らSSPタイ同窓会参加者全員で記念撮影



シェアリングセッション。(左から)サハルタイ准教授、タナコーンさん、パットさん、キティさん。セッションは、2024年度より開始されたNEXUS事業についてJSTより説明があった。また日本学生支援機構タムプン氏より、日本留学に関する情報提供がなされた。最後にネットワーキングセッションの時間が設けられ、参加者同士交流が深められた。

のための交流・体験プログラムに参加した。最後のパネリストであるラジヤマンガラ工科大学の講師であるキティさんは、2015年にSSPで産業技術総合研究所を訪問し、デジタルエンジニアリングを学んだ。パネリストからは、SSPに参加することになったきっかけや、文化交流、日本での学び、アカデミックにおけるSSPのインパクトなど多岐にわたり自身の経験などを共有した。タナコーンさんは、現在でも当時のプログラムに参加者と継続して交流し、専門分野において協働していると強調した。また、パットさんは、技術を開発し、それをどのようにに社会実装に繋げていくか、デジタルクオリティイヤーだけでなく、コマリシャリゼーションプロセスの大切さについてSSPを通して学んだと付け加えた。

話題は、困難をどのように乗り越え、変化に順応してきたかにも及び、パットさんは「日本の文化に順応することは難しいことではない」とし、「言語もタイと日本では多少アクセントに違いがあるので、焦らずスロウダウンし相手に伝えることを優先する必要がある」とコメントした。

次世代への提言として、キティさんは「言語とタイムマネジメントが大切」とし、パットさんは「自分自身に正直であること、将来は何が起ころかわからないので、ターゲットゴールを設定し、問題に直面する準備を」と呼びかけた。タナコーンさんは、ネットワークの大切さを強調し、キティさんに付け加える形で、「日本に行く前に少しでも日本語を学んでおくことで手助けになるだろう」と助言した。